

《研究報告》

聖徳太子南無仏と五劫思惟の法蔵菩薩

尾 田 武 雄

聖徳太子南無仏と五劫思惟の法蔵菩薩

尾田 武雄

はじめに

- I 聖徳太子南無仏
- II 法蔵菩薩の肥満と憔悴像
- III 瘦せ仏の法蔵菩薩の分布

IV 庶民に広がる教え

V 聖徳太子南無仏と法蔵菩薩石仏の造立意図
おわりに

はじめに

富山県は真宗王国といわれる。^(注1) 県西部の砺波地方には本願寺5世綽如上人が創建した井波別院瑞泉寺(真宗大谷派)や、本願寺8世蓮如上人が創建した城端別院善徳寺(真宗大谷派)があり、また高岡市伏木古国府の地には、瑞泉寺と同じく蓮如上人が開いたとされる勝興寺(浄土真宗本願寺派)がある。浄土真宗の教えは弥陀一仏で、偶像崇拜を禁じており、「おおよそ造像・起塔は、弥陀の本願にあらざる所行なり」(覚如著『改邪鈔』)、また「他流には〔名号より絵像、えぞうより木造〕というなり、当流には〔木造より絵像、えぞうより名号〕というなり」(『蓮如上人御一代記聞書』)との教えがある。また真宗地帯は、民間信仰が薄く貧弱であると思われてきた。近年は石仏調査が進み、多様な民俗宗教が息づいていることが報告されている。筆者は40数年にわたり、県内の石仏調査に関わってきた。その中、特に真宗門徒による石仏の造像が関心を寄せてきた。たとえば筆者が住む砺波市では10数年を経た石仏の悉皆調査では、総数1,357体が報告された。近隣の南砺市では1,440体、小矢部市では1,788体の報告がある。砺波地方全体では5,000体近くの石仏となり、富山県全域では約15,000体であろう。これらの造像のほとんどが江戸時代末から明治期にかけてのものである。

県内の路傍には当然地蔵の数が多いが、県西部には井波別院瑞泉寺の太子堂に係る聖徳太子二歳像も多く造立されているのがこの地方の特徴でもある。これらを造像したのが真宗門徒であり、大事に祭祀も行われてきた。石仏全体の造像も、多くの真宗門徒たちが関わっている。^(注2)

一方県東部にも石仏が多く、特徴的なのは五劫思惟の法蔵菩薩の石仏が多々見受けられることである。また阿弥陀如来、弥陀三尊、七高僧、聖徳太子孝養像などの石仏も見受けられ、真宗門徒の関わりが強く感じられる。^(注3) 本稿では県内の石仏の中で、特に真宗と

関わりが感じられる聖徳太子南無仏と五劫思惟の法蔵菩薩について報告したい。

I 聖徳太子南無仏

井波別院瑞泉寺は、南北朝時代の明德元年(1390)に本願寺5世綽如上人によって創建され、海外から送られた難解な国書を上人が解説して天皇から一寺を寄進されたと伝えている。また戦国時代には、越中における一向一揆の重要な拠点となった寺院である。江戸時代中期から「太子伝会」が行われ、聖徳太子の伝記を絵画化したものの絵解きや「聖徳太子南無仏」(写真1)の開扉が行われ、境内などに出店や見世物小屋

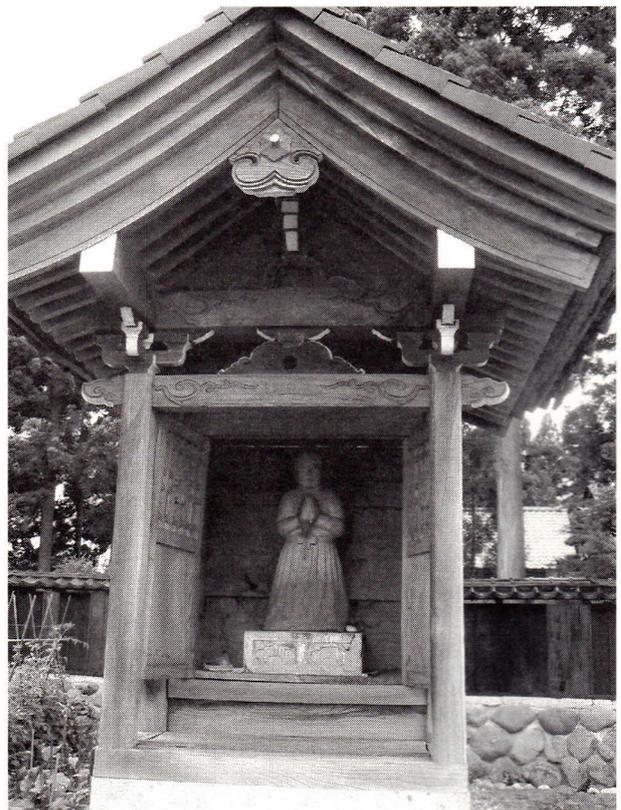


写真1 聖徳太子南無仏(砺波市五郎丸地内)

が出て賑わった。本堂脇には並列するように南無仏を安置する太子堂がある。

明治12年（1879）に瑞泉寺は香部屋から出火し山門と式台門を残し、本堂、庫裏、太子堂などが焼失した。この際本堂再建は東本願寺から7万円を借財して、明治18年になんとか建立したが、太子堂再建は本山からの支援がなく難渋していた。そこで瑞泉寺は寺宝である南無仏や絵伝の巡回を、農閑期に行って浄財を集めることで、大正7年（1918）に太子堂が再建された。この巡回先は砺波地方を始め、婦負郡、射水郡などに加え、遠く金沢近郷から能登や加賀方面に及んだとされる。^(注4)

砺波地方にある南無仏の石仏の年次在銘から、多くは明治20年代から大正期にかけてのものであり、ちょうど瑞泉寺の南無仏の巡回に呼応するかのようによ像された。野にある地蔵は、幼くして世を去りその子の供養的なものが多いが、南無仏はその意図はやや異なる感がある。

寺の焼失から30年ばかりの間に、約240余体の南無仏が、驚異的な形で流行仏のように造立された。これは太子堂再建の募金活動のために勸進相撲などが行われ、農閑期には、瑞泉寺宝物の巡回や太子講などが開かれた。巡回先の民家では南無仏を迎えることが、一種のステータスにもなり、熱狂的に歓迎されたのである。また南無仏を造像することもそれに類似した意識がある。その波及により野辺に小さい太子堂が建立された訳である。

またこの頃、本山東本願寺では、幕末に焼失した御影堂と阿弥陀堂の再建に向けて、明治12年に世界最大級の木造建築となる両堂再建の発意が行われ、全国から延べ300万人を超える人足が馳せ参じていた。明治28年（1895）には御影堂遷座供養会が行われ両堂が完成した。砺波地方からは多くの門信徒が駆けつけ「砺波詰所」が設置され、明治の妙好人砺波庄太郎などを輩出している。^(注5)

県の西部は真宗大谷派（お東）が多く、蓮如上人にまつわる開基伝承を持つ寺院が多い。反対に東部は浄土真宗本願寺派（お西）が多く、宗祖親鸞聖人にまつわる伝承を持つ寺院が多い。それ故か、西部には王法為本の世界が広がり、東部には教条主義的な雰囲気がある。

明治3年閏10月27日、富山藩領内において寺院を1派1寺に改め、直ぐに合寺せよという「合寺令」が発せられた。翌日には仏具や家具を取り払い指定の寺院に合寺させ、翌々日には役人が検分に出向くという厳しいものであった。これに対しては強く反対する門信徒が数多くいた。東部は浄土真宗本願寺派の勢力が強

く、「越中学国」といわれるように学僧が多く輩出している地でもある。宇奈月善巧寺の僧銘は自坊で学塾「空華蘆」を開き、門弟3千人に及んだとされている。これは僧侶ばかりではなく、庶民にもその影響があったであろう。それは石仏を見ても明らかである。五劫思惟の法蔵菩薩（写真2）の分布は、立山町や富山市の旧大山町で濃密に存在している。これは明治中期から後期にかけて、廃仏毀釈や合寺問題で抑圧されたエネルギーが、爆発的に動いた時期と重なるといえるだろう。そしてこのエネルギーを支えた講社は、近代化を目指す教団再編に組み入れられていったのである。^(注6)

明治44年（1911）宗祖聖人六百五十回大遠忌法要が厳修される。この時期は真宗王国の名にふさわしい富山県の講の最盛期であったかも知れない。このような状況下に、瘦せ仏の五劫思惟の法蔵菩薩が造像されるようになった。これについては拙著『とやまの石仏たち』などでも報告してきたが、その広がりが全国的に展開していることが分かった。

II 法蔵菩薩の肥満と憔悴像

「正信偈」の冒頭に「帰命無量寿如来 南無不可思議光 法蔵菩薩因位時」とあり、法蔵菩薩は民衆に親しまれている菩薩名である。

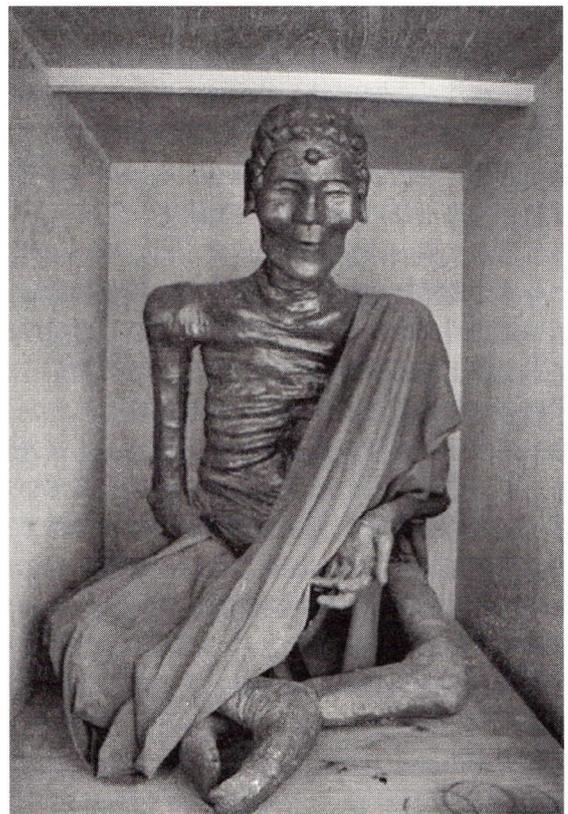


写真2 五劫思惟の法蔵菩薩（碧南市応仁寺）

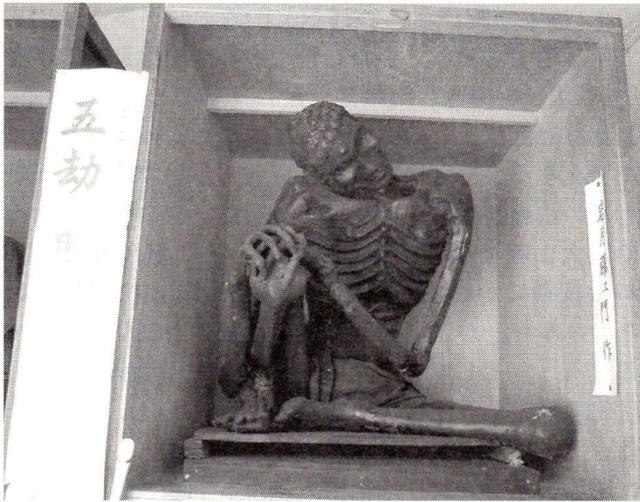


写真3 瘦せ仏の五劫思惟の法蔵菩薩

法蔵菩薩は「ある国王が国と王位を捨てて沙門となり、法蔵比丘（菩薩）と号して、世自在王仏のもとで諸仏の浄土の因を覩見し、五劫のあいだ、思惟して四十八願を選び取り、兆載永劫にわたる修行の結果、十劫の古えに無量仏となり、現に西方の安楽世界に在します。」^(註7)と説かれており、^{いんに}因位の法蔵菩薩が願と行に報われて阿弥陀如来となったとある。

即ち『無量寿経』に説く「阿弥陀如来が因位（法蔵比丘）のとき、浄土の建立と一切衆生の救済を願う大願を、五劫にわたって思惟をこらし修行した。」と説かれている。『無量寿経』にいう五劫思惟阿弥陀如来像は、奈良五劫院や京都大蓮寺のような螺髪を大きく湛えている。長い間思惟されたので髪が伸びたとされているのである。肉付きは良く、幼子のような肥満な体軀である。石仏としては京都金戒光明寺（浄土宗）や知恩寺（浄土宗）の墓地に見られる。

ところが、県内の富山市（旧大山町）や立山町を中心に分布する法蔵菩薩の石仏はそのような像容ではなく、一見してエキゾチックな姿態で、ガンダーラの苦行釈迦像のように下腹部がへこみ、あばら骨がくいまみ、瘦せ細り如何にも憔悴した苦行の瘦せ仏である。一方、頭には螺髪、肉髻があり如来像であることがわかる。その像がここでは法蔵菩薩と認知されているのである（写真3）。この修行像は、釈迦如来の苦行像に酷似した像容である。この石仏は、像容としては苦行釈迦像であるが、信仰の内容は阿弥陀如来の前身である五劫思惟の法蔵菩薩とされているが、この像を造立された人々は「阿弥陀如来像」と意識されていたのである。

龍谷大学の井上見淳准教授の『五劫思惟の阿弥陀如来』肥満・憔悴論－玄雄師の論を手がかりにして^(註8)の高論がある。肥後国で五劫思惟の法蔵菩薩

が肥満であるか、憔悴であるかの論争が江戸時代末期に起こっていたことに論究されている。筆者が要約すると、肥後国に「二明星」といわれた2人の学匠がいた。「功存一環中一到轍」の系譜につながる学匠、能令速満^{のうりょうそくまん}（1812－86）と鬼木沃州（1817－84）であり、2師は同門であり後年共に勧学になっている。

この2人が、五劫思惟の法蔵菩薩の身形が肥満か憔悴かとの論争を行っている。発端は文久2年（1862）隈庄雲晴寺の法座での沃州師の説教にある。下関の某寺より伝わった憔悴の仏像を五劫思惟の法蔵菩薩として仰ぎ、講会の本尊としていた。その五劫思惟の法蔵菩薩は肥後の地では僧俗ともに広く認知され、法蔵菩薩は五劫思惟を経て憔悴したとする理解が深く浸透していたようである。突如この席上で沃州師は、五劫思惟の憔悴義を宗義に根拠のない憶測であるとし五劫思惟肥満説を展開された。これが学林にも問い合わせが行く騒動に発展していくのである。井上氏はその論点などを細かく検証されている。この状況に、翌年（1863）龍華学派の碩学遠藤玄雄師が介入する。同師は文久元年に年預勧学をしており学林からのアクションであろうと井上氏は推察されている。同師は憔悴像の支持を打ち出している。ところで玄雄師は「僧僕－慧雲－大瀛－曇龍」と続く系統である。僧僕は越中国で生まれ、西本願寺四代能化法霖に師事し、空華学轍^(註9)の僧鎔、芸轍^(註10)の祖慧雲、七代能化の智洞などの弟子を育てている。

さて、日本石仏協会編『日本石仏図典』や『続日本石仏図典』に「法蔵菩薩」の項目がない。「法蔵菩薩」そのものの像容は筆者の管見であるが見当たらない。阿弥陀如来像の名品と多様性についての基本文献である奈良国立博物館編『阿弥陀佛彫像』（1974年）の論文で光森正士氏は、「五劫思惟阿弥陀像」について、「五劫思惟の阿弥陀像は、まるで笠をかぶったような長大な螺髪をもつことに特徴がある。（略）髪が長大になっているのは、五劫という長い間、思惟三昧にふけり、理髪を行わなかったのかかる姿になったことを示しており、（略）なお、五劫思惟の阿弥陀像と称するものの中で、身には腰部に小さな裂（裾）を纏うのみで、ほとんど裸形とし、非常に瘦せ細った体軀をもち、片膝を立て、両手でこれを抱え込み、頭を前にうなだれて坐す像がある。しかし、これは実は苦行釈迦の像で、五劫思惟の阿弥陀像ではない。」としている。筆者は、「憔悴像はおそらく真宗の系統にしか伝わらない独自の造形なのではないだろうか。」^(註11)とされる先述の井上氏の推察に納得できるので、光森氏の五劫思惟の阿弥陀像に対する論考について注意喚起をしたい。

Ⅲ 瘦せ仏の法蔵菩薩の分布

瘦せ仏として憔悴した法蔵菩薩は富山市東南部の旧大山町辺りに多く9体を数える。他には立山町に4体、旧富山市に2体、旧婦中町に2体、旧山田村に1体、上市町に1体があり、民家や寺院の内仏として木像が旧大沢野町に2体、黒部市に1体をみる。旧婦中町や旧山田村などでは法（寶）蔵菩薩や五劫思惟阿弥陀如来と銘文が入っている。数が多い旧大山町からやや遠いので、法蔵菩薩という仏が多くは認知されていなかったため、敢えて「法蔵菩薩」と銘文を入れなければならなかったのだろうか。もしそうであれば、ますますこの石仏は富山市東南部の旧大山町辺りの狭い範囲で、認知され信仰されてきたのであろう。

具体的にみると、富山市上滝の旧大川寺公園口の大きな堂の中に2棟の祠がある。向かって右側の祠には浮き彫りの地蔵立像が2体安置され、左側の祠には瘦せ仏の法蔵菩薩がある。全身が金色で、衣文は黒色、光背の中は青で着色されている。右足を立て、その上に両手を置き、その上方向に頭を置く姿態である。修行中のため瘦せ仏である。一般的に路傍にある地蔵や不動明王と違って異様な雰囲気を漂わせている。大きさは高さ67センチ、幅30センチでやや大ぶりの石仏である。筆者の管見であるが、このような像を全国で62体を確認している（表1）。地域的にみると、石造では23体の富山県が飛び抜けて多く、木造では富山県の5体、次いで広島県に多いことがわかる。真宗の篤信者が多い、北陸、南九州（薩摩）、三河門徒の愛知県などで見受けられる。憔悴像は真宗地帯に伝えられたものと理解できる。^(注12) また石像は庶民の営為によるもので、木像が元により原型にされたものと推察する。

表1 瘦せ仏の五劫思惟像の全国分布

	石造	木造	紙本	青銅製	紙粘土	合計
愛知県		2			3	5
青森県		1				1
石川県		1	1			2
大阪府		1				1
香川県	5	1		1		7
鹿児島県		1		1		2
京都府		1				1
富山県	23	5	3	1		32
広島県		4	1			5
福井県	2	1				3
福岡県		1				1
山形県	1					1
山口県						1
合計	31	19	5	3	3	62

龍谷大学の学長であった前田慧雲氏が、「越中ハ、義教、僧樸二公ノ豊沛タリ。一（中略）一世称シテ学国ト曰フ。良ニ所以アルナリ」^(注13)と述べているように、浄土真宗本願寺派では近世の越中を「学国」と呼んでいた。それは江戸時代中期に第5代能化に就任した義教（越中氷見・円満寺）を始め、多くの学匠が越中から輩出し、大きな学派を形成していたからだ。そこには大別して2系統が存在し、尺伸堂学派と空華学派である。尺伸堂学派は善空（安貞・越中氷見・西光寺）の遺言により、義教と善空が協力して学塾・尺伸堂を設立した。義教が能化になった後、越中の門弟はみな尺伸堂で学んでおり、当時は大心海に属する者もこの学派に入っていた。善意（芳山）、善護・善濟・善容（義霜）という西光寺法嗣のほか、僧樸（越中大門・高橋家）なども尺伸堂に学んでいる。空華廬を開いた僧鎔は僧樸に師事しているから、一時期は空華学派も尺伸堂学派の影響を受けていたかも知れない。

一方、空華学派であるが、空華廬は宝暦8年（1758）に僧鎔が善巧寺に設けた学塾で、高柳（滑川市）明樂寺の柔遠を始め、薩摩の道隠も門弟に連なり、多くの学匠が入門している。僧鎔・柔遠・道隠は「空華三師」と称され今日でも尊ばれており、浄土真宗の教学に大きな足跡を残している。

空華学派は、奇しくも尺伸堂学派が三業惑乱の際に異義とされ、勢力を失ってから台頭し始め、近世を通じ本願寺派の教学において、主流派の位置を譲らなかったとされる。この三業惑乱とは、尺伸堂学派の多くが「無帰命安心」という三業帰命説に傾いていったのに対し、空華学派は芸州学派（安芸学派）とともに非三業派の中心として、その誤りを糾弾して論戦を行ない、江戸幕府の寺社奉行までも介入する事件であった。^(注14)

空華学轍とは、浄土真宗の宗学の一学派であって、黒部市宇奈月町浦山の善巧寺第十一世住職僧鎔を開祖とする学派である。『空華轍』の学風は、絶対他力の主張に立ち、衆生が浄土に往生できるのは、全部が阿弥陀如来の名号・願力によるものだという思想に立つものである。^(注15)

空華学轍の思想は難しい教義に基づくものであって、庶民に法蔵菩薩への信仰が醸成した経緯は明らかにされないが、身近に感ずる雰囲気はあったのではないか。そんなことを考えたとき、法蔵菩薩の像が富山県東部に多く展開するのは、この地方に底流する真宗信仰の発揚といえる。

IV 庶民に広がる教え

富山県は獅子舞や盤持・草相撲・チョンガレなどの民俗芸能が盛んである。これらは古い歴史を持つものもあるが、多くは幕末から明治期に起こったものが多い。真宗王国といわれており、若衆報恩講などもこの時期に盛り上がったものである。石仏の造立も盛んであり、盆踊りなども栄えた。そのような中、魚津市に伝わる盆踊り歌謡に古代神がある。『魚津市史上巻』に、その仏教的口説きの歌詞「二十八日さま口説」が掲載されており、一節を紹介する。

「ここに同行の御茶呑み咄し聞けば誠に御縁となりて」と始まり、「(略)見捨てられたる大罪人を 阿弥陀如来は助けん為に 五劫思惟に思いをください(略) 思い出しては行住坐臥に 唱えまいかや 只南無阿弥陀仏」ここには庶民に広がった、絶対他力の思想と、浄土に往生できるのは、阿弥陀如来の一方向的な働きによるものだという喜びの思想がある。つまり、「空華轍」の学風が満ち溢れているような気がする。

また、『富山県史 民俗編』に、荷方節(八尾町)の「平太郎」^(註16)の歌謡が次のように掲載されている。

「アアー、五劫思惟の苗代に ちょうさいようこう(兆載永劫)のしろをして 一念帰命の種おろし 自力雑行の草をとり 年々相続の水流し 往生の秋になりねれば この実とること有難や」これは関東在住中の親鸞聖人の話と伝えられる。茨城県水戸市飯富町本願寺派大部山真仏寺(伝おおぶの平太郎の寺)に残る伝統歌と関わっており、その「しんらんさまの田植歌」を紹介する。「五劫思惟ノ苗代ニ 兆載永劫ノシロヲシテ 一念帰命ノタネヲオロシ 自力雑行ノ草ヲトリ 念々相続ノ水ヲ流シ 往生ノ秋ニナリヌレバ コノミトルコソ ウレシケレ 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」この伝統歌が広く各地で民謡化している。

「古黒部村調書」^(註17)にも田植歌を収載している。

「めでたきものは 御米の種 五劫思惟の
縄引きそーろ
一念帰命の 水流し込み
二念称名の種蒔き下ろし
至心信楽の 苗飢植ゑ込んで
雑行雑修の草ひきそーろ
秋と夕と 名アのれば 米の実取り上げて
嬉し田の神」

また、佐伯安一氏^(註18)は明治39年富山県が命じて管下行政庁から徴した「伝説伝謡俚諺調査答申書」より、入善区域の「田植歌」を紹介している。

「極楽花とは何とさす 何とさす
南無阿弥陀仏の六字の花さすガイノ

六字さすガイノ

五劫思惟の苗代に

チョーサイヨーコー(兆載永劫)の

種をまく 往生の秋になれば このみをとるこそうれしかろがヤ」

これら庶民の唄には「空華轍」の学風が感じられる。庶民の唄の中に仏教語が入ることは、仏教つまり真宗の教えが深く根付いていた証であろう。大桑齊氏は「近世人にとって問題を解決していくパラダイム、つまり論理の枠組みですが、それは、実は仏教しかないじゃないか。(略)仏教語でしか考えることが出来ないのではないかと思っている」^(註19)と言っているが、近世も近代の庶民は意識や信仰は同じレベルではないかと思われる。これはこの地方において真宗が庶民に土着しているかのように思われる。

富山市の旧山田村柳川の路傍の石堂の中に菩薩が安置されている。『山田村郷土史』には、「(前略)これは次の願いが込められている。人間は生まれながらにして悪人はいない。しかし実際この世の中には心の迷いから五逆(五つの最も重い罪悪)をなすものが絶えない。悪のない明るく住み良い世の中を作るには先ず悪人を救わなければならない。悪党たちの心をいかにして善の方向に向けるか、世のすべての人々を救うためにもいつまでもこのことを考え続けなければならない。亀田翁のこの思いを世人に親しみやすい菩薩に託したもので、頬に手を添えて考えにふけるその姿にはその思いが強く表れている。冬取り付けられる板の雪垣には墨で『五劫思惟の本願に偏えに私一人の為』と書かれてあり、この菩薩の性格を表現したものと思われる。」^(註20)とあり、これは『歎異抄』第十八条に通じると考える。

また、富山市市場(旧大沢野町)森宅に残る次の文書にも同意のものを感ずる。

「弥陀ガ法蔵菩薩トヘリクダリ三世ノ諸佛ニ、見捨テラレ十方浄土ノ門トジテ、永不成佛ノ土凡夫五逆十悪ノ徒モノヲ、助ケント骨ト皮トニ御成リ下サレ五劫トイフ、永ノ年月御思案下サレ永劫ニ修行ヲ、コラシ超世無上ノ御本願南無阿弥陀佛ヲ、御成ナサレタレハコソ時ハ末代機ハ下根ナクナク、三途ノ舊里ニ沈ム身ガカカル、御苦勞アツタレハコソ皮得ル信ノ信心一ツデ永ノ未来ハ、弥陀同体思ヒノママノサトリヲ開キ、娑婆ニ居ナガラ正定不退ノ分人ニ加ハリ、二世安樂ノ身トナリタルモ願力ノ御不思議ゾト知ラヌムカシハ、是非ハナイコノ御姿ヲ拝ムニツケ、悔悟懺悔ノ心ヨリ称名モロトモ謹デ拝礼ヲ」

なお「節談説教の芸能性」^(註21)に、丹羽文雄氏の小

説『青麦』の文中から「上手な説教師は自由自在に善男善女の感情、心理をあやつることができた。質問されることはなかった。『聖人常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり』というところでは、唯一の泣かせどころのように、浪曲師顔まけの節まわしでうなった。さんざん翻弄され、いい気持ちにさせられた参詣者は、ひとり残らず仏に助けられたような気持ちになってしまう。」とある。このように五劫思惟の弥陀に対し、庶民は感謝報恩の心情を強く抱かされてきたのだらうと思われる。五劫思惟の法蔵菩薩、いわゆる瘦せ仏は庶民の心中に培養されてきたのであろう。

V 聖徳太子南無仏と法蔵菩薩石仏の造立意図

真宗は弥陀一仏で、以前の民間信仰や土着の庶民信仰が真宗の教えに消され、希薄になっていると思われる。事実その一面は十分に窺うことができる。しかし県全体の石仏調査で知る各種石仏の多さから、多様な民間信仰が庶民の奥底に脈々と流れていることを知ることができる。

特に、明治20年頃からの太子南無仏の石仏造立などは、すべて真宗門徒が造立や管理に関わっているのである。弥陀一仏を説く僧侶達も、この道端や野辺にある太子南無仏の法要に、積極的に関わり続けていることも特記すべきことである。また、太子南無仏の造立には、死者供養よりも、地域のシンボリックな意味合いを持っていたり、若者が草相撲で優勝した賞金で太子像を勧進したり、個人が四十二歳の厄払いとしたり、日露戦争の戦勝記念などにも行われていることに注目したい。

富山市の旧大山町辺りの法蔵菩薩の造立意図についても、地域内の中番にあるものは、その銘文に「七年記念」「世話人青年」とあり、東小俣にあるものは「御大典記念」「東小俣同行中」、岡田にあるものは「世話人當村若連中」、花崎にあるものは「火災為御禮」と記されている。県西部の太子南無仏の造立意図と似ていて、若者が何かの記念に、あるいはお礼に造立したように思われる。根底には真宗の報恩感謝の念があるように考える。時期を同じくして真宗風土の中に、太子南無仏や法蔵菩薩の造立に込めた庶民の心情を垣間みることができる。

法蔵菩薩の石仏が多い「新川地区には質素な日暮しの中で法義弘通を行うことなどを決議され、革新の機運がみなぎっていた。」^(注22)とあり、新川郡は加賀藩直轄として、真宗門徒は熱狂的に聞法されていたのである。そして、幕末期からの盆踊りや節談説教などでも、真宗の庶民への普及の影響も大きいものがあろう。

報恩感謝の心、つまり「私のためにご苦労され、瘦せ細られた法蔵菩薩」に感謝し、恩に報いるための善行であり、生かされる喜びに歓喜した証でもあろう。生きていることに、また救ってくださる弥陀に対し御恩報謝の念が瘦せ仏の法蔵菩薩に向けられ、庶民である門徒の平生業成の生き方として、法蔵菩薩が道端や野辺に安置されたのであろう。真宗門徒にとっては、阿弥陀像は家の仏壇に安置されるものであり、野辺に置くのは憚れたのであろう。

法蔵菩薩の石仏のうち、年次在銘のあるものは16体中11体がある。最も古いのが富山市岡田の「明治三十八年」銘であり、最も新しいのが立山町千垣の「昭和五十三年」銘である。この70年間余りに造立されたものが分かっている。中でも明治後期から大正期にかけての短期間によるものが多い。

ちょうどこの時期は、県西部では聖徳太子南無二歳像が熱狂的に造立された時期に合致していることは興味深いといえる。この太子南無仏は、井波別院瑞泉寺の太子堂に安置される木仏の摸刻石仏で、砺波平野に約240余体が祀られている。先述したように明治12年に瑞泉寺は大火に見舞われて、同18年に本堂の再建がなされたが、太子堂の再建はまもなく、大正7年によく再建されたのである。この間に、瑞泉寺の太子像や宝物の巡回による浄財募りが行われたのである。この明治20年頃から、太子堂の再建までの約30年間に集中的に造立された訳である。これが時期を同じくして、県東部の旧大山町を中心に法蔵菩薩の石仏が造立されたことに深い因縁を私は感じるのである。

おわりに

江戸時代中期から明治期の東西本願寺教団には多くの優れた学僧が輩出し、地方の教化が進められ、特に、幕末から明治期にかけて、いよいよ浄土真宗が庶民に浸透した。例えば東本願寺では、元治元年(1864)に戦乱により焼失した御影堂、阿弥陀堂など伽藍の大部分が焼失した。この両堂を苦心して再建し、明治28年4月20日、「御影堂遷座法要」が執り行われ、2万人を超える門徒・僧侶などで白洲が埋め尽くされたという。殊に阿弥陀堂の再建に献身的に尽力した人物として、砺波の妙好人砺波庄太郎を輩出している。砺波地方は米石高も抜きんでており郷土芸能などが盛んであった。真宗王国といわれ、若衆報恩講などもこの時期に盛んに勤められた。野辺にある多くの石仏も幕末から明治期の造立が多い。県西部の砺波地方では太子南無像が、県東部の旧大山町地域では法蔵菩薩が盛んに造立されたことは、往時の庶民の逞しさと信仰心の証である。しかしこれらの信仰の興隆は、学塾の衰退や節

談説法の禁止など、明治期以降の真宗教学の近代化の波により衰退していつてしまった。これらを見つめ直すところに、真宗が力を増す方向性があるのかも知れない。

平田徳氏は、「従来の近世真宗史は、僧侶と門徒大衆の「二重構造論」で語られてきたが、支配—被支配、中心—周縁、合理的な僧侶—非合理的に生きる門徒の図式が成り立つ^(注23)」とした。そういえば真宗に関する歴史や民俗学の研究者は、ほとんど僧侶であり、「支配側、中心側、合理的な理論側」で論じられてきた感がある。近世真宗を門徒側から見る視点も如何に重要であるかということは賛同できる。奇瑞を排除する僧侶、奇瑞を求める門徒、妙好人に対する評価の違いも双方では明らかに異なるのではなかろうか。

私は、柳田國男氏が開拓した日本民俗学は、外来文化である仏教を取り扱うことで日本人の生活の根底がわかり、仏教以前の中に真の日本人の姿を見つける作業が行われたと思う。野辺にある地蔵も、元は道の神として捉えられていた。仏教に根付いた民俗があり、阿弥陀仏や真宗とともにあった人々にも真宗民俗といえるものがある。このような視点から聖徳太子南無仏や五劫思惟の法蔵菩薩などの石仏に対する調査を前に進めたいと思う。

門徒側からの研究スタンスによって真宗民俗学の展望が大いに開けるように思われる。五劫思惟の法蔵菩薩などは真宗教学の遺物のみとはいえず、大いに研究を深めることにより、近世の真宗世界とは一体どのようなものであったか、いまだ不明瞭な部分が多いのが現状でないかと思っており、これから期待を感じさせる。まさに近世真宗と近代真宗が隔離されてはならず、真宗王国富山での石仏造立の多さから多くの示唆があると思う。私の専門となる石仏学という学問も未だ若く、今回のような視点から近世真宗を学ぶことによっても、石仏学の進展につなげたいと考える。

(おだ・たけお 日本石仏協会理事)

(注)

- (1) 「全仏教寺院中の浄土真宗系寺院の割合」(昭和43年)によると65%以上の県が富山県、石川県、滋賀県、鹿児島県の四県であり、富山県は70.8%と一番高い比率である。『富山県史 現代 統計図表』(1980)
- (2) 尾田武雄：「砺波地方に展開する聖徳太子南無石仏」、『砺波散村地域研究所研究紀要 第14号』(1997)、同：「太子さま(聖徳太子南無仏)」、『とやまの石仏たち』(2008)

- (3) 尾田武雄：「やせ仏の法蔵菩薩」、『とやまの石仏たち』(2008)、同：「真宗と石仏」、『北陸石仏の会研究紀要 第8号』(2005)
- (4) 「瑞泉寺太子伝会」、『井波町史』(1970)
- (5) 尾田武雄：『明治の妙好人 砺波庄太郎』(2001)
- (6) 富山別院開創百周年記念出版編纂委員会：『越中念仏者の歩み』(1984)
- (7) 真宗新辞典編纂会：『真宗新辞典』(1983)
- (8) 『龍谷教学 第44号』(2004)
- (9) 宇奈月善巧寺に僧侶が開いた学塾で、諸国に3千人の子弟がいた。同学派は幕末、明治期の浄土真宗本願寺派の主流的な教学の役割を果たしたといわれる。
- (10) 安芸(広島県)国の門徒で、この地から出た学僧を「芸轍」と呼んだ。三業惑乱における大瀛などが活躍した。
- (11) (8) と同書
- (12) 杉崎貴英帝塚山大学准教授、青原さとしドキュメンタリー映画作家・教信坊住職及び平井一雄北陸石仏の会会長などから教示を得る。
- (13) 『学苑談叢』(原本は明治24年3月刊)、『新編真宗全書』(1994)
- (14) 土井了宗：「学国越中の人脈」、『学国越中』、富山別院開創百周年記念出版編纂委員会編(1984)
- (15) 桐溪順忍：「空華学轍の学説」、『学国越中』、富山別院開創百周年記念出版編纂委員会編(1984)
- (16) 「民謡」、『富山県史 民俗』(1973)
- (17) 「古黒部村調書」、『下新川郡史稿』(1909)
- (18) 「越中の田植歌」、『富山史壇 44・45合併号』(1969)
- (19) 大桑斉：『日本仏教の近世』(2003)
- (20) 山田村教育委員会編：『山田村郷土史』(1993)
- (21) 関山和夫：『庶民文化と仏教』(1988)
- (22) (6) と同書
- (23) 『大系真宗史料 伝記編9』(2012)における引野亮輔：「近世宗教世界における普遍と特殊」を参照